

人文学報

No.428

日本語教育学

言語接触論から見たウチナーヤマトウグチの分類

.....ダニエル・ロング (1)

m i c - J コーパスの公開について—「外国人へのインタビュー篇」「日本人へのインタビュー篇」—

.....西郡仁朗・崔 文姫・磯野英治 (31)

TMU聴解テストの開発について

.....神村初美・劉永亮・柳悦・彭韻・林香淑・

.....神谷英里・陸黎莉・十市佐和子・西郡仁朗 (40)

「御方々」「方々」小考—源氏物語を資料として—

.....竹部 歩美 (一)

『春色恋廻染分解』四編～五編 (翻刻)

.....浅川 哲也 (二七)

首都大学東京都市教養学部人文・社会学系
東京都立大学人文学部

言語接触論から見た ウチナーヤマトゥグチの分類

ダニエル・ロング

dlong@bcomp.metro-u.ac.jp

1. 接触変種の分類とウチナーヤマトゥグチ

本論でウチナーヤマトゥグチ（高江洲頼子1994，狩俣繁久2002）とはどのような言語体系であるかについて検討する。ウチナーヤマトゥグチは伝統的な沖縄語（琉球語の沖縄本島諸方言）と標準日本語との接触によって誕生した言語体系である。

ウチナーヤマトゥグチは従来様々な観点から捉えられてきた。大野（1995）はそれを「中間方言」としてとらえている。永田高志はこれを『琉球で生まれた共通語』として取り上げて、ピジン・クレオール研究との共通点を指摘した上で（永田1996:7-8）、「琉球新方言」という名称を用いている。奄美群島ではウチナーヤマトゥグチに似た「トン普通語」が使われているが、真田信治はこれをネオ方言として捉えている。比嘉光龍はウチナーヤマトゥグチを混合言語として捉えている（Fija 他2009）。そして、狩俣繁久はこれをクレオールとして捉えている（かりまた2006）。このいずれの見方にも正当性があり、完全に否定することはできない。またそれぞれのアプローチには有意義な側面がある。

確かに、接触によって生まれた言語変種（これを「接触変種」と呼ぶ）には様々な種類のものがみられる。よく知られているピジンやクレオール以外にもクレオロイド（準クレオール）やポスト・クレオール、中間言語、コイネ、ネオ方言、限定ピジン、拡大ピジン、ジャーゴン、混合言語、二起点接触言語などといった現象がある。こうした分類は非専門家にとっては紛らわしく感じられることもあり、専門用語が必要以上に造られているという批判もあろう。しかし、何ごとにおいても、ある現象に関する研究が深まれば深まるほど、より

詳細な分類が必要となってくる。そして、細かい用語を作れば作るほど、専門家の間の話を通じやすくなる。それゆえ、言語接触理論におけるウチナーヤマトゥグチの位置づけやその分類を、具体的な特徴を取り上げながら考察する必要があると感じた。

従来の言語接触論は主にピジンとクレオールを対象としてきたが、実は接触言語にはたくさんの種類がある。例えば、接触する言語の数やその類似性の高さによって、違う結果になる（違う類の接触言語が生まれる）から、それぞれの場合に違う名称が使われる。類似性の高い言語体系（つまり同じ言語の複数の方言）が接触するとコイネ (koine) が生じる。類似性の低い言語が接触するとピジンが生まれる。しかし、ウチナーヤマトゥグチは標準日本語と琉球語の伝統方言との接触によって生まれた。これらの二つの言語体系は類似性が高いと言うべきか、類似性が低いと言うべきかは微妙で複雑な問題である。

琉球語は確かに日本語とは違う言語という見方ができる。二つの言語は相互理解が不可能である。一方、2つは同系統であり、文法的にも、語彙的にも類似性の高い2つの言語である。言語接触は、類似性の高い言語（オランダ語と英語、スペイン語とカタラン語、琉球語と日本語）が接触する場合と、類似性の低い言語（英語と日本語、英語と西アフリカのバンツ語など）が接触する場合の両方が見られ、両者には多くの相違点が見られる。

従来のピジン・クレオールでは3つ以上の言語が接触していることが普通であるが、沖縄の言語接触では琉球語と標準日本語という二つの言語体系だけが合った。2つのみの起点言語が絡み合ったときに生じる「混合言語」の研究が進んでいる (Bakker1994)。

以下では、様々な接触変種との比較からウチナーヤマトゥグチの分類を検証する。

2. ウチナーヤマトゥグチは「中間言語」と呼べるか

琉球語は日本語と別言語だと考えると、標準語習得は「第二言語習得」と考えなければならない。そうすると、英語や中国語、韓国語、ポルトガル語など

を母語とする人が使う中間言語とウチナーヤマトゥグチとの共通点・相違点を探ることは価値の高い課題として認められよう。

例えば、「楽しいでした」のようなく形容詞+断定助動詞+過去形>の形式を考えよう。これは標準語の「楽しかったです」のようなく形容詞+過去形+断定助動詞>とは形態素の順番が変わるものである。こうした形式はスペイン語を母語とする日本語学習者（長友1993）に報告されているが、英語圏や中国語圏の話者にもよく見られるのである。これは琉球語使用地域でもよく耳にする形式で、しかも非常にフォーマルな場面でも出るのである。筆者が2004年9月23日に沖縄県の離島で調査を行なっている際に次のような発話を聞いた。お祭りの一環として演芸会が行なわれたのであるが、終了後、村長が数百名の観客の前に立ち、「今日の演芸会いんげいぐいは大変楽しいでした」と挨拶したのである。

この他に、例えば、ボイス現象をみても外国人の日本語習得者と沖縄・奄美の話者との共通点が見られる。高江洲(1994:267)は「能動態+てある」と「受動態+ている」を取り上げ、標準日本語の「窓が開けてある」に対してはウチナーヤマトゥグチでは「窓が開けられている」が使われると述べている。大城・尚(2007: 23,64-65)は同じ現象を「沖縄地域共通語」と呼んで、取り上げている。同じような文法現象が奄美の若年層話者でも確認されている。ロングが2009年夏に、20代前半の奄美出身話者4人を対象に面接調査で4人とも「部屋に花が飾られている」のような文を普通に使うと答えたのである。

ボイスは幅広い文法範疇で、これは授受（やりもらい）動詞の使用ともつながってくる（例えば「間違いを指摘された」と「間違いを指摘してもらった」など）。沖縄で「殴られるぞ!」や「ガムもらう?」（標準語「殴るぞ」、「ガムあげようか」）のような構文が若年層話者にごく普通に用いられる。これらの形式は無関係に見えるかもしれないが、標準語との違いは同一の要素にある。すなわち、標準語では「私に」という場合にこれらの構文が使えないが、ウチナーヤマトゥグチでは使用が可能である。別な言い方をすると、標準語では話者と動作主が同一人物である場合はこれらの構文が不可能である。標準語では「あいつに殴られるぞ!」も「あいつにガムもらってくる?」も可能であるが、

表1 中間言語の下位分類 (ロング2008:11)

非母語話者がもつ第2言語の言語体系 (広義の「中間言語」)						
正用	誤用					
	恣意的な誤用	規則的な誤用				
		原因が母語にある (従来の理論で説明できる)	原因が母語にない (従来の理論で説明できない, 狭義の「中間言語」)			
			原因が目標言語にある			原因が不明 (言語本能と関係する?)
母語干渉	転移	過剰般化	パラダイムの合理化	識別		

表2 中間言語として分類したウチナーグチ (大城, 尚2007)

ウチナーヤマトゥグチ (語源)	標準日本語	起源の分類
あじしてみて (あじしまー)	あじみする	干渉
海を歩いている (あっちゅん)	習慣として海に出ている	転移
僕, 彼女にチョコをくれた (くいゆん)	あげた	転移
～はず (ハジ)	だろう	転移
ピンクい	ピンク色の	過剰般化
楽しいでした	楽しかったです	パラダイムの統一
でーじ, 上等		意味拡張
恥ずかしくて話せん。話されん (状況可能)	話せない	識別
フランス語話しきれんよ。(能力可能)	話せない	
うち雨, うち鍵	家に吹き込む雨, 車内に閉じこんだ鍵	造語

「(俺に) 殴られるぞ!」と「(私に) ガムもらう?」も標準語では非文になるのである。

近年, 日本人が使う日本語の変異や変化と外国人が犯す日本語の誤用 (中間言語) を比較することに対する関心が高まっている。先駆的な研究として金沢裕之 (2008) の『留学生の日本語は未来の日本語』が挙げられる。その比較研究のために, 誤用の類型 (タイポロジー) が必要である。表1にその分類を試みたものを提示する。

ウチナーヤマトゥグチは, 話者の母語 (ウチナーグチ) と目標言語 (標準日本語) との間のできた言語体系であるという意味において, 中間言語に匹敵す

るものだと言えよう。そう考えて、表2でこの類型によって、ウチナーヤマトゥグチのいくつかの特徴を分類してみた。ウチナーヤマトゥグチの例は主に大城・尚(2007)からとったものである。伝統方言が関与している(言語干渉や転移)が、その原因だと思われる項目のあとに語源を括弧の中で示した。

以上、中間言語とウチナーヤマトゥグチとの共通点をいくつか見てきた。しかし、ウチナーヤマトゥグチが中間言語と大きく異なる点もある。中間言語は外国語学習者の頭の中に存在する言語体系であるのに対し、ウチナーヤマトゥグチは地域社会のコミュニティ言語である。中間言語は母語ではないのに対し、ウチナーヤマトゥグチは母語である。中間言語は一時的な現象であるのに対し、ウチナーヤマトゥグチは長期的な現象である。中間言語は第二言語習得者個人個人が作り上げる言語体系であるのに対し、ウチナーヤマトゥグチは(現在は)親から子へと使えられているのである。相違点が多いため、ウチナーヤマトゥグチを中間言語と呼ぶことができないという結論に至る。

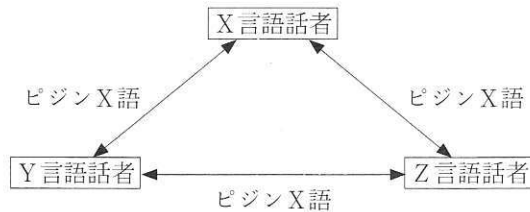
3. ピジンとピジン化

本題に入る前に、本稿で頻繁に使われる言語接触論の用語の意味や使い分けを確認する。ピジン(pidgin)は複数の言語の話者がお互いの言語が理解できない状態で集まるときに自然発生的に生じる単純化された言語体系である。この「複数の言語」は最低いくつかの言語を意味しているかという問題に関する議論が続いてきた。本稿では、言語接触論の主流の考え方に沿って、狭義のピジンが形成されるには、最低3つ以上の言語が接触していなければならないという立場を取る。

2つだけの言語が接触する場合も当然あるが、そうした場合に、3つ以上の言語が接触する場合とは質的に違う種類の(つまりピジンとは異なる)言語体系が形成されるというデータがたくさんある。こうした類の接触を以下の第10節「混合言語」で検証することにしよう。

狭義のピジンが形成されるのに3つ以上の言語が必要とされる理由を考えよう。図1のように、X語を母語とするXさんとY語を母語とするYさんが、コ

図1 ピジンが発生する典型的な状況



コミュニケーションのためにX語を使っている状況があるとする。

XさんがYさんに分かりやすいと思われるX語（フォリナー・トーク）を使うだろう。またYさんがX語を自然習得によって身につけているため、不完全なX語（中間言語）を使うだろう。この両者の言語使用には単純化された、または崩れた（ブロークンな）ところが現れるだろう。しかし、XさんはX語の母語であるゆえ、狭義のピジンに見られる完全な単純化が起きにくい。XさんとZさんとの会話においても同様である。

しかし、YさんとZさんはお互いのコミュニケーション手段（共通言語、いわゆるリングフランカ）としてX語を使わざるを得ない。これは両者にとって第2言語としてその言語使用である。これが「3次のハイブリッド化」(tertiary hybridization)とされている現象であり、完全な文法体系の大規模な単純化が見られる狭義のピジンが生じる決定的な条件だとされている。

ピジンが発生する典型的な状況では、「力」を持っていない2つ以上の集団が、力をもっている人たちの言語を不完全な形で習得する。図1で言えば、X族は何からの意味で力を持っている。その力の具体的な原因は、経済力、優れた技術、戦力、圧倒的な人数など様々である。

Y族とZ族は、X語から語彙形態素を取り入れることから、X語を「語彙提供言語」(lexifier language)と呼ぶ。X語は「上層言語」(superstrate language)と呼ぶこともある。なお、Y族やZ族は、X語を自然習得しているため、X語の文法的形態素（例えば冠詞や前置詞など）や文法事項（統語論規則）を正確に把握しきれずにいる。Y族やZ族はどうしても、X語をそれぞれ

の母語のフィルターを通して理解する。例えば、Y族はX語の単語をY語の語順に従って並べ、Z族はX語の単語をZ語の語順で並べる。彼が話すことばは表面的にはX語に聞こえるかもしれないが、むしろその語順などの構造を成しているのはY語やZ語である。そのために、Y語やZ語を「基層言語」(substrate languages)と呼ぶ。言い方を変えると、Y族とZ族は、目標言語であるX語の文法を誤解(再解釈)することによって、それを単純化し、再構築するのである。

ピジン化の初期段階では、母語による違いが著しい。例を考えよう。ハワイのピジン英語を話すとき、タガログ語を母語とする人は、動詞で始まる構文で考え、“Work hard des people”(よく働くこの人々)と言う。一方、韓国語や日本語を母語とするピジン英語話者は、母語の影響を受け、動詞などの述語を文末に持って行き“Name me no like”(その名前は私は好きじゃない)と言う(Carr 1972; Bickerton & Odo 1976; Bickerton 1981)。ピジンが発展すると個人間の変異が減り、均一化し、「結晶」する(Thomason 2001: 169)。それゆえ、ピジンはやがて自らの文法規則を持つようになる。Sebba(1997:15)が言うには、「ピジンの語彙や文法は(根本的なものとは言え)その使用者に容認されている。けっして「何でもあり」の状態ではない。」ということである。

このようにある程度の均一化を達成しているピジンを「安定ピジン」と呼ぶ研究者がいる(Sebba 1997)。他の研究者は、安定していなければ「ピジン」と呼ばないから、わざわざ「安定」と言う必要はないと訴える(Winford 2003)。また研究者によっては、安定する前の段階を「前ピジン」、「ジャーゴン」と呼ぶ。

Holm(2000:5)は次のように言っている。「個人がその場その場で自分のことばを単純化し、縮小することができる。例えば、リスボンで買い物をするニューヨーク人。しかし、ここに見られるのはピジンではなく、何の規範もないジャーゴンである。」しかし、こうした区別は決して明確なものではないので、「前ピジン連続体」の存在を指摘する言語接触論者もいる(Holm 2000:69)。

Hymes(1971:84)の昔の定義はいまだに教科書に使われている(Winford

2003:270)。「ピジン化は、内的縮小とともに、使用域の減少が起きる複雑な社会言語学的変化である。この過程を経て、規範となったのはピジンである。」ここでは、Hymes の定義に沿って、ピジン化を、非母語話者が多くいるコミュニティで長期にわたって使われる単純化される英語の発展、と定義する。

さて、ここまで、ピジン化は単純化と述べてきた。これは具体的にどのような現象だろうか。ピジン化という過程には三つの現象が見られる (Trudgill 2002, 68-75)。以下の通りである。

1. 縮小化 (reduction, これを貧弱化 *impoverishment* とも言われる)。語彙の数、統語素の数、スタイルの数が減る。
2. 混交化 (*admixture*, これを干渉 *interference* とも言われる)。母語から発音、文法、意味論的要素が転移される。大人としての第2言語習得の特徴。
3. 合理化 (*simplification*)。実は複雑な現象。不規則的なところの削除 (不規則動詞など)、重複するところの削除 (名詞・形容詞の文法的性)、透明性の高い「分析的要素」が増える。¹

なお、縮小化は「未完成な習得」、混交化と単純化は「誤った習得」に匹敵する。

小笠原諸島のポニンピジン英語は安定ピジンまで発展したという証拠がない。しかし、小笠原ピジン英語はピジンの条件の一つを満たしていたことが明らかである。それは「3次のハイブリッド化」ということである。つまり、小笠原英語は英語の非母語話者同士の言語として使われたことは明らかである。「小笠原ピジン英語」よりも「小笠原前期ピジン英語」や「小笠原非安定ピジン英語」などのネーミングのほうが良かったかもしれない。

言語学者の意見が一致する点は、<ピジンには母語話者がいない>というこ

1 この三つ目の特徴は言語接触の文献では普通「*simplification*」と言っている。直訳すると「単純化」だが、むしろ、この3つの特徴を合わせて「単純化」と考えたほうが分かりやすいから、そうすると「広義の単純化」と「狭義の単純化」というややこしい説明が生じる。また、ここでの *simplification* の中身を見るとむしろ「合理化」と名づけたほうが良いと思って、あえてそういう日本語訳を選んだ。

とである。ピジン使用者は、その定義からして、必ず別の母語を持っている。ピジンが人の母語となると、クレオールと呼ぶ。

話者がピジンを使ってコミュニケーションをするさい、話者が頭の中で、自分の母語で認識できる複雑な文法関係でも、文法的に制限されたピジンでは言い表せないことがある。ピジンは「私、疲れているし、お腹すいた」や「黙って働け！ぶつぞ！」といった概念を表現するのに向いている。しかし、ピジン使用者が「ねえ、もし私が、あれはもう持ち上げられないぐらいお腹が空いていると彼に言っても、私を殴るぞと脅し続けると思うの？」のような複雑なことを考え付いても、ピジンでは言い表せないため、あきらめて沈黙で働き続けるしかないだろう。

以下でこれまで取り上げた概念をまとめておく。

- 前ピジン (pidgin) —ピジンの初期段階。
- ジャーゴン (jargon) —特定の目的のため。個人差が大きい。限定された語彙、表現。例えば、命令形があるけど過去形がないなど。
例：Kaikai good. You kaikai, savvy?
逐語訳：食べる良い。あなた食べる、分かる？
意識：この食べ物おいしいよ。あんた食べなさいよ。分かった？
- 限定ピジン (limited pidgin) —標準語から見れば、「崩れたことば」だが、個人差がなくなり、「使われる言い方」と「使われない」がはっきりする。言い換えれば、「規範」ができる。
- 前ピジンの連続体 (pidgin continuum) —前ピジンとその次の発展段階にあるジャーゴンやさらに発展した限定ピジンとの違いは程度の問題で、実際問題としてこれらの現象は区別することが困難であり、連続している事実を指している用語。
- 拡張ピジン (expanded pidgin) —母語話者が（あまり）いないが、文法的にも、語彙的にもかなり高度なものへと発展している。複雑文（従属節など）が見られる。日常的コミュニケーションのほとんどのニーズにこたえられる言語体系。次の例はパプアニューギニアの国家語である「トクピシ

ン」のものである。

例：Ol i no save long ol i mekim singsing.

単語ごとの語源 all he no savvy belong all he make him sing sing

意識：あの人たちが演奏していたことを彼らは知らなかった。

4. ウチナーヤマトゥグチは「ピジン」と呼べるか

これまで、言語接触研究の一般的な理論、概念の設定、用語の定義に注目してきた。背景知識としての「理論編」であった。以下では、ウチナーヤマトゥグチを5つの概念と照らし合わせて、それぞれに当てはまるかどうかを検討する。結果から言うと、これらのいずれにも当てはまらないという結論に至るが、「違う」という結論を出すだけではなく、「どの点と同じでどの点が違うか」という検証過程も重要なのである。この「どの現象にも当てはまらない」という結論をネガティブに捉えるのではなく、むしろ、ウチナーヤマトゥグチは従来の研究から抜け落ちている概念であるというポジティブな立場からその適切な名称を考える。というのも、(ここが重要だが)ウチナーヤマトゥグチが形成されたときに起きた言語接触は、沖縄だけの特有な言語現象ではなく、むしろ世界中の言語には似たような現象が存在すると思われる。だから、こうした現象をきちんと分析し、その条件や概念としての範囲をきちんと定めることによって、世界のはかの言語を研究している学者にとっても役立つ「分析道具」が提供できると考えているのである。

さて、ウチナーヤマトゥグチの重要な特徴を整理すると、以下のようになる。

- ウチナーヤマトゥグチは伝統的な琉球語とは異なる。
- ウチナーヤマトゥグチは、東京で話されている全国共通語とも異なる。
- つまり、ウチナーヤマトゥグチは第3の言語変種である(大野眞男1995; なお、ネオ方言との関係については第7節を参照されたい)。
- しかも、ウチナーヤマトゥグチは伝統方言と標準語との接触によって生まれたものだから、「接触言語」(contact language)の一種であることは間違いない。

●第二言語（外国語）として話される「中間言語」と違って、ウチナーヤマトゥグチは沖縄の若年層・中年層話者の母国語（第一言語）そのものである。

●第一言語である点は（狭義の）クレオールと似ている。（なお、クレオールは言ってみれば、いったんバラバラになった文法構造のパーツを集めて、それらを再利用して新たな言語体系を再構築したものである。）しかし、そもそもその言語体系の再構築が必要である理由は、ピジン化による単純化が起きたからである。したがって、クレオール化を考えるためにはピジン化も考慮しなければならない。

まず、ピジンは定義上、異なった3つ以上の言語話者の共通コミュニケーション手段として使用される単純化された「間に合わせ」の言語体系である。一世紀前の沖縄で初期のウチナーヤマトゥグチが形成されたときは、確かに琉球系統言語の多数の言語変種（方言、言語）が接触していた。沖縄本島の北部の話者が南部に来たとき、あるいは離島の人々が本島に来たときにウチナーヤマトゥグチがリングフランカ（共通の言語手段）という意味で役立ったことは間違いない。しかし、こうした「方言間のリングフランカ」となることが、ウチナーヤマトゥグチが発展した主な理由かという点、そうではないようである。

上で述べたように、ピジン化は次の3つの現象からなる。

- 縮小化（貧弱化）
- 混交化（干渉）
- 合理化（単純化）

これらに匹敵する現象は100年前の琉球語使用地域で起きたのだろうか？まず、縮小化を考えよう。ピジン英語などでは、語彙が極限に減る。19世紀に横浜で生じたピジン日本語の例と比較しよう。そこで、arimas は日本語の「在る、有る」以外にも、「欲しい」、「ください」、「です」、「持つ」、「居る」などの意味で使われていた。また、ピジンでは単語の数が縮小されるから、一つの単語が多義的に使われる。色々な意味のときに間に合わなければならないから、これが拡張ピジン、さらにクレオールの段階になると、識別することが要求される。例えば、ピジン英語で同音異義語となった英語の sun（太陽）と sand

(砂)が両方とも、音韻的に変化(単純化)し、同音異義語の"san"となる。しかし、畳語(重複化)によって新しい区別(san = 太陽, san-san = 砂)が生まれる。もちろん、これは標準英語にはない新しい区別の仕方である。

ウチナーヤマトゥグチにはこうした縮小化の例はまず思い浮かばない。縮小化に匹敵する現象はあるにしても、断片的な現象で、ピジン英語のような一般的な現象ではないだろう。これは語彙の数の話だが、統語素の数はどうだろうか。ウチナーヤマトゥグチと標準語日本語との違いはむしろ、前者が少ないどころか、標準語にない区別がある場合が目立つ(例えば、単純の過去形「た」とevidentialの過去形「よった」)。

スタイルの数もウチナーヤマトゥグチでは特に減っているわけではない。例えば、上述の19世紀横浜ピジン日本語では、標準日本語の普通体・丁寧体・敬体のスタイルが(ごちゃまぜになった形で)一本化され、使い分けられていない。こうしたスタイルの「縮小化」は特にウチナーヤマトゥグチの特徴ではない。(琉球語の敬語が使いこなせない人が増えているという琉球語のスタイル数減少は見られるが、ここで言っているのは目標言語のスタイル数の減少である。沖縄の人について「標準語の敬語や丁寧体が使えない」という話は聞かない)。

パラダイムの合理化はどうだろうか?この具体例として、不規則な事象の合理化があるが、ウチナーヤマトゥグチの「形容詞+でした」はそれに当たるだろう(表3)。

表3 標準日本語の例外とウチナーヤマトゥグチの合理化(過去形)

	標準日本語		ウチナーヤマトゥグチ	
	現在形 +です	過去形 +でした	現在形 +です	過去形 +でした
名詞	車です	車でした	車です	車でした
形容動詞	静かです	静かでした	静かです	静かでした
形容詞	楽しいです	*楽しいでした	楽しいです	楽しいでした

ウチナーヤマトゥグチで使われる「られる」敬語法もパラダイムの合理化である。表4のように、標準日本語では「その島は綺麗だから、ぜひ行かれてく

表4 標準日本語の例外とウチナーヤマトゥグチの合理化(敬語)

	標準日本語		ウチナーヤマトゥグチ	
	普通体	敬体	普通体	敬体
終止形	行く	行かれる	行く	行かれる
過去形	行った	行かれた	行った	行かれた
進行態・結果態	行っている	*行かれています	行っている	行かれています
依頼表現	行ってください	*行かれてください ヤ	行ってください	行かれてください

ださい」とは言えない。標準語のパラダイムの例外的な枠となっている。しかし、ウチナーヤマトゥグチでは、体系に空いている穴が埋められ、そうした言い方が可能になる。

混交化はどうだろうか。ウチナーヤマトゥグチの多くの特徴(圧倒的に多い?)はこれに当たる。

結論から言えば、琉球語地域語で生じた初期の接触言語(100年前のウチナーヤマトゥグチ)はピジンに見られる典型的な特徴である「縮小化」が見られなく、一般に言われているピジン化とはかなり違う現象であったことが分かる。最後に、まとめとして典型的なピジン現象とウチナーヤマトゥグチとの比較をしよう(表5)。

表5 ピジンと初期ウチナーヤマトゥグチの比較

	典型的なピジン	初期のウチナーヤマトゥグチ
異なった言語話者の共通コミュニケーション手段として使用	○	△ 同一言語(琉球語)の異なった方言話者同士で
接触する言語は3つ以上	○	×
語彙の縮小	○	×
統語素の縮小	○	×
スタイル数の減少	○	○
混交化	○	○
合理化	○	○

5. クレオール、クレオロイド、急速クレオール化

ピジンを使う話者に見られる「考えられること」と「表現できること」とのギャップはクレオール話者にはない。クレオール話者は子供のときに、ピジンで第一言語（多くの場合は話せる唯一の言語）として獲得している。彼らの頭の中で、文法が拡張され、語彙的形態素が文法事項へとリサイクルされる。例えば、*suppose*（推測する）が *s'pose* に短縮され、假定法マーカー（上層言語の標準英語の *if* に当たる文法事項）として使われる。この複雑さへの発展は、他の言語からの影響によるものではなく、子供たちの脳の中で起きる変化であることから「非接触型拡張」と呼ばれる (Trudgill 2002: 69-70)。クレオールは「ピジンの母語化による拡張」であり、子供たちによって創造されるクレオールは（ピジンと違って）完全な言語体系を成している。彼らの持っているクレオール言語によって、脳で考え出されること全てが言語化可能となるのである。

かつての研究では、子供たちによる「安定ピジン」(stable pidgin) の母語化現象（これを gradual creolization と呼ぶ）がかなり注目されたが、近年、これと異なる過程が注目を浴びている。Sebba(1997:134) が次のように語っている。「子供たちが、安定ピジンや拡張ピジンが話されている定住コミュニティに生まれることもあるが、子供たちが、初期ピジンが安定ピジンに発展するまで生まれるのを待っているわけではない。だとすると、大人の間で使われている唯一のリンガフランカが、発展の初期段階のピジン（つまり、ただのジャーゴン）であるコミュニティに子供たちが生まれてくることも（少なくとも理論的には）あり得ることだ。」このように、安定していないピジンが子供たちの母語として習得される過程を Thomason & Kaufman(1988) が「急速クレオール化 abrupt creolization」と呼んでいる。

急速クレオール化では、ピジンが第一世代の間で文法的に複雑化していく。言うならば、ピジン化で起きた縮小 (reduction) がこの拡張 (expansion) 過程で修復される (Trudgill 2002:70)。急速クレオール化のシナリオとして、例えば次のような状況が考えられる。それまで無人島だったところに集まってきた

人々はそれぞれ母語が異なるため、ピジン英語を使ってコミュニケーションをしている。そのコミュニティに生まれ育つ子供たちは、ネイティブによる英語（あるいは大人が母語としているそれ以外の言語のネイティブによる話しかた）をめったに耳にすることはないので、このノンネイティブ同士の間で使われるピジン英語を自分たちの母語として獲得する。

なお、多くの話者がノンネイティブとしてピジン英語を使っているコミュニティでも、数の少ない英語母語話者が非常に影響力を発揮している場合もある。小笠原諸島、及びピトケアン (Pitcairn) 島では、英語母語話者は極めて少数であった。こうしたところで生じる接触言語はクレオールとの共通点も相違点もある。クレオールと似ているのは、

(1)他言語から導入された単語や言語形式 (admixture) と、

(2)数多くの成人した非母語話者の不完全な習得による単純化、の点である。

一方、クレオールと異なるのは、

(3)単純化はそれほど劇的なものではないし、

(4)ピジン化による縮小とその後のクレオール化に見られる拡張の文法構造のスクラップアンドビルドによる言語の極端な再構築も見られない。

こうした接触言語は「クレオロイド」と呼ばれる。

クレオロイドは、事情の違う現象を指す用語として使われる。最初に使ったのは John Platt(1975) で、シンガポール英語の下位変種を指していた。これはクレオールのように、使用者の第1言語の影響が見られるが、本当のクレオールのように劇的な文法的再構築が起こっていないものである。その後、同じ用語がインド洋のレユニオンクレオールのような言語体系を指すことばとして使われるようになった。モーリシアクレオールは形成後、標準語との接触が少なかつたため、独特な変遷を遂げたが、レユニオンクレオールは標準語フランス語との接触が続いていた (Trudgill 1983)。その結果、後者の構造の方がフランスに近い (Corne 1982)。最近、Holm がこうした現象にまる一冊の本をささげているが、彼は「半クレオール (semi creole)」と呼ばれているものをクレオロイドの候補として検証した末、「部分的に再構築された言語 (partially

restructured languages)」という使い心地の悪い用語に決めている (Holm 2004:xiii)。

Sebba(1997: 162) は「本当のクレオールではないが、クレオールのような形式を持つ」という意味においてアフリカンス語はクレオロイドに当たるとしている。特に、「他のクレオールに比べて、過激な単純化が少ないものの、この章で取り上げるほかのクレオールと同程度、本来のオランダ語のテンス活用が縮小されている」という点を強調している (Sebba 1997:166)。

Sebba が「単純化」と呼んでいる過程を、Trudgill が「単純化 (simplification)」と「縮小 (reduction)」の二つに分けている。彼のクレオロイドの概説をここで引用する。

世界にはポスト・クレオール (post-creoles, 脱クレオール化によって当初の上層言語に似てきたもの) に見えても実はそうではない言語変種がたくさん存在する。これらの変種は、起点言語に比べて、導入 (admixture) や単純化 (simplification) の程度が相対的に低い。しかし、過去にはピジンがなかったことが分かっている。他のところでも指摘したように (Trudgill 1983:102), こうした言語をクレオロイド、そして、これらの形成過程をクレオロイド化と呼ぶことができる。

すなわち、クレオロイド化は導入 (admixture) や単純化 (simplification) の二つの過程から実現している。しかし、クレオールと違って、クレオロイドは縮小そして後の拡張による修復の歴史を持っていない。クレオロイドは最初から縮小を経していない。したがって、部分的な脱クレオール化を経ているクレオールとクレオロイドを別けるのは歴史的な違いであり、共時的な検討だけでは区別できない。クレオロイド化は、数多くの成人した非母語話者の不完全な習得による現象である。しかし、クレオロイドの場合、母語話者との接触は途絶えていないため、縮小が起きていない。クレオロイドの優れた例はアフリカンス語であり、オランダ語に比べて明らかにクレオロイド的である (Trudgill 2002: 71)。 (訳および傍点は筆者によるものである。)

同じ章で Trudgill は上記の 2 種類の現象を区別する必要性を訴えている。シンガポール英語のように、母語として使われていない「非母語話者クレオロイド」とアフリカンス語のようにコミュニティ全員の母語として使われる「ク

レオロイド」の二つを区別している。

最後に、上記のトラッドギルの引用文のうち、筆者が傍点を付けた部分に注目したい。氏は、クレオロイドが発展したコミュニティには、「過去にはピジンがなかったことが分かっている」と述べ、「母語話者との接触は途絶えていない」としている。なお、筆者は別書では、19世紀半ばの小笠原諸島で発展した英語基盤の接触言語（そして後に20世紀の混合言語の起点言語の一つとなった言語）はクレオロイドだったと主張している（Long2007）。しかし、そこでそのクレオロイドの過去にはピジン（少なくとも不安定な初期ピジン）があった、そして英語母語話者との接触が希薄ながらも続いていた、という主張をつらぬく。すなわち、証拠（わずかながらの状況的証拠）を見れば、19世紀の小笠原諸島で非安定型ピジンが発展して、やがて急速クレオロイド化によって、クレオロイドへと進化したという説を裏付けていることを訴える。

従来 of ピジン・クレオール of パラダイム（2つの言語ではなく、3つ以上が接触する場合） of 様々な用語や現象をまとめると以下 of ようになる。

- クレオール (creole) — ピジンを聴きながら育った子供がそれを第一言語として習得する。そこで、不完全な言語だったピジンが、彼らの脳裏の中で、完全な言語へと発展していく。
- 急速クレオール化 (abrupt creolization) — ピジンがまだ流動的（個人差が大きい）ままで、それがコミュニケーション手段として使われているコミュニティに生まれてきた子供たちの母語となる。それによって、ピジンとして固定化しないまま、文法事項が作り上げられ、言語体系として複雑化していく過程。
- クレオール連続体 (creole continuum) — クレオールが使われている社会では、場面による使い分けが見られることが多い。例えば、クレオール英語がインフォーマルな場で使われ、標準英語がフォーマルな場で使われる。こうした場合、クレオールを「下位変種」(basilect)、標準英語を「高位変種」(acrolect) と呼ぶ。しかし、これは二者択一的な使い分けという

より、この二つを終着点としてことばの調整が行なわれているのが実態である。二つの間にある「ややクレオールの」な「中位変種」(mesolect)の段階も無数にあり、連続体を成している。

- 脱クレオール化(de-creolization)ークレオールから標準語(そのクレオールの上層言語)への移行する過程。
- ポスト・クレオール(postcreole)ーかつてクレオールだった言語が再び標準語の影響を受け、標準語に近付いていった後の言語体系。

6. ウチナーヤマトゥグチは「クレオール」と呼べるか

さて、クレオール、またはクレオール化という現象はウチナーヤマトゥグチの場合に当てはまるのだろうか？

以下で一般的なクレオールやクレオール化の特徴をあげる。

1. 母語話者が生じる(ピジンを話す人々にはそれぞれの母語があるが、クレオールを話す人にとってそのクレオールこそが第一言語であり、思考言語でもある。)
2. クレオールは、ピジン化段階で混ざった他言語の要素(admixture)は特に排除されるわけでもないので、残る。
3. 起点言語(source language)に比べ、単純化されている。(もちろん、クレオール化の過程で再び複雑な要素を持つようになるが、それは起点言語とは異なった複雑化である。例えば、ピジン英語では、過去形を表わす方法であるed付加も、不規則動詞の母音変化もなくなる。クレオールでは、動詞のうしろにseを入れることで再び過去形を表わせる方法を獲得するが、標準語から見ればこれはどうしても単純に見える。)
4. 起点言語に比べ、合理化されている(分析的、規則的である。)
5. 「クレオール化」が起きる。つまりピジン化段階で起きた縮小化・貧弱化ところが補修される。これは、接触によらない拡張(non-contact induced expansion)である。ここで言う、「接触によらない拡張」とはすなわち、上層言語との接触によって複雑化するような変化ではない内的

(internally-induced) 拡張のことを言う。「脱ピジン化」も拡張だが、これは標準変種（上層言語）と再び接触することで起きる。「脱クレオール化」は外的変化である意味においては、方言の「標準語化」と似ている。

上の特徴を表6にまとめた。

表6 クレオールとウチナーヤマトゥグチの比較

	典型的なクレオール	ウチナーヤマトゥグチ
それまでいなかった母語話者が誕生した	○	○
混交化（母語からの導入）	○	○
起点言語より単純化されている	○	×
起点言語より合理的	○	○
内的拡張	○	×

ウチナーヤマトゥグチは、現代の若年層・中年層話者にとっては母語であるから表6の1点目はクレオールと共通している。他言語の要素（伝統的な琉球語の文法事項）の admixture は残るので、2点目もクレオールと似ている。

3点目の文法的単純化だが、ウチナーヤマトゥグチの場合、最初から（ピジン化に匹敵する100年前の段階で）単純化はあまり起きていないから、現代のウチナーヤマトゥグチでは「単純化」があまり目立たない。

4点目の合理化は、上述のように起きているから、現代のウチナーヤマトゥグチではこれが目立つ。

5点目の判断が難しい。ウチナーヤマトゥグチでは、確かに内的変化が起きている。また、ある意味ではこれを「拡張」とみることができるだろう。しかし、一般のクレオール化で言われている「拡張」とは、文法事項の削除や縮小に対する「修復」である。ウチナーヤマトゥグチで起きている内的変化や拡張はこの修復とは異なる。

7. ウチナーヤマトゥグチは「ネオ方言」と呼べるか

ウチナーヤマトゥグチは「ネオ方言」という現象に当てはまるか？

ネオ方言は三つの条件を満たしているものである。

- (1) 伝統方言と異なる（これがネオの部分）
- (2) 全国共通語（標準語）と異なる（これが方言の部分）
- (3) 伝統方言と標準語との接触によって生まれた第三の言語体系

琉球語は日本語族 (Japonic Languages) の一変種であり、ウチナーヤマトゥグチはそれと標準日本語（東京方言）との接触によって生まれた新しい言語変種である。こういう意味において、ウチナーヤマトゥグチは「ネオ方言」に当たる。しかし、そこで問題が二つ生じる。一つは社会心理学的な問題である。つまり、学者は方言を冷静に「日本語族の下位変種」と定義するのに対して、一般社会では長い間「方言」という単語は否定的なイメージを伴っていた。もう一つは言語構造と関わる問題である。つまり、「ウチナーヤマトゥグチはネオ方言」というのは問題ないが、「ウチナーヤマトゥグチはただのネオ方言」というのは問題のある発言だろう。それは、新潟のことばと東京のことばとの距離よりも、首里のことばと東京のことばとの言語的距離が大きいので、同一の現象としてみることもつらい、すなわち色々な重要な事実を見落としてしまう、という問題である。

ネオ方言の最初の例（原型、プロトタイプ）は兵庫県のものであった。内地（特に関西）のネオ方言の場合、出発点である母語と目標言語である東京語との言語的距離が近い。これらを、母語と目標言語との言語的距離がかなり大きいウチナーヤマトゥグチと比較することが難しい。そして、同一の概念として捉えるのには限界がある。

関係している言語体系の相互理解を考えると違いが大きい。例えば、伝統的な神戸方言（母語）と東京語（目標言語）との相互理解があるが、伝統的な沖縄語であるウチナーグチ（母語）と東京語（目標言語）との相互理解はない。また、新しくできた神戸のネオ方言と伝統方言との相互理解があるが、ウチナーヤマトゥグチと伝統方言との相互理解はない。

ここまでの考察の結果を表7にまとめてみた。

表7 ネオ方言とウチナーヤマトゥグチの比較

	典型的なネオ方言（内地のネオ方言）	ウチナーヤマトゥグチ
伝統方言と異なる	○	○
全国共通語と異なる	○	○
伝統方言と標準語との接触によって生まれた第三の言語体系	○	○
母語と目標言語との相互理解がない	×	○
母語が新しくできた言語体系との相互理解がない	×	○

8. ウチナーヤマトゥグチはクレオロイドと呼べるか

さて、ウチナーヤマトゥグチは従来のピジン・クレオールのパラダイムでは説明しきれない現象だったら、どういう接触言語だろうか？新しい種類の接触言語だろうか？

クレオロイド (creoloid, 準クレオール) という概念がある。以下で、現在のウチナーヤマトゥグチはこのクレオロイドに当たるかどうかを検討する。結論を先に言うと、クレオロイドという概念はまだ充分追究され、検討されていない。用語はまだ充分定義されていない。「クレオロイド」という名称で取り扱われている言語体系にはずいぶん異質なものが含まれている。よって、これまでクレオロイドと言われてきた言語体系の下位分類が必要であると言えよう。

しかし、従来クレオロイドと呼ばれた様々な言語体系の整理、再分類を行なった結果、ウチナーヤマトゥグチはそのどれか一つに当たるかと言えばそうではない。むしろ、ウチナーヤマトゥグチはクレオロイドの一つに分類できそうだが、従来報告されたものに類似するのではなく、新しい種類のクレオロイドとして新設すべきだと結論に至る。以下、この結論に至った経緯を詳しく述べ

る。

creoloid と呼ばれている言語現象には実は 2 つの違う種類のものがある。二つの異なった現象がごちゃ混ぜになっている。

- (1) シンガポール英語 (Singlish) のような言語体系。実は creoloid という用語を作ったのは John Platt で、彼が指していたのはこのシンガポール英語だった。非ネーティブ型クレオロイド (non-native creoloid) である。
- (2) アフリカーンス語 (Afrikaans) . オランダ語に比べては単純かされている。ネーティブ型クレオロイド (native creoloid) である。

Singapore English は非母語話者コミュニティ (広東語, 客家語などの母語話者) で使われている。家庭内言語は Singapore English ではない。Afrikaans は母語として、つまり家庭内言語として使われている。こういう意味では、ウチナーヤマトゥグチは Afrikaans に近い。しかし、大きな違いがある (表 8)。

表 8 クレオロイド (Creoloid) と呼ばれている言語の分類

	ウチナーヤマトゥグチ	Singapore 型クレオロイド (非母語話者クレオロイド)	Afrikaans 型クレオロイド (母語話者クレオロイド)
元々は第 2 言語習得だったか・第 1 言語習得だったか	第 2 言語習得	第 2 言語習得	第 1 言語習得
一つの言語変種は教育言語で目標言語だったか?	はい	はい	いいえ
母語と目標言語とは同系統・別系統の言語	同系統	別系統	同系統 (ただし, L1 習得だった)
複数の方言による均一化・コイネ化	いいえ	いいえ	はい
現在は母語・非母語となっている	母語	非母語	母語
母語の干渉	有	有	無
構造的な単純化	無	有	有
形式が似ているのに、意味・用法が異なる事象の直訳が問題	はい	いいえ	いいえ

表8でウチナーヤマトゥグチの特徴を全て網掛けにした。そして、Singapore型とAfrikaans型では、これと共通語している要素に網掛けを入れた。これで、5項目の特徴の内、前者と共通しているのは2項目、後者と共通しているのは1項目であることが分かる。すなわち、ウチナーヤマトゥグチは従来研究されてきた2種類のクレオロイドのどちらとも異なる新しいタイプの接触言語であると言える。

上のことから分かることは、クレオロイドとは一つの現象ではなく、実は複数(また多数)の現象、実はかなり異質なものがごちゃ混ぜになっている「総称」として使われていることが言える。つまり、従来「ピジン」と「クレオール」という二種類の接触言語が注目されて追究されてきたが、言語接触の結果で生じた「接触言語」にはたくさんの種類のものがあると言える。これからこれらの同定、分類(または分類するための条件)、定義づけなどをしっかり行なう必要があると言える。

9. ウチナーヤマトゥグチは「コイネ」と呼べるか?

コイネという現象は同一言語の多数の方言が接触するときに新たに生じる方言体系のことである(Trudgill 1986)。コイネを生み出す典型的な社会状況と言えば、その言語が最初から話されていない地域にその言語の複数の方言を話す人が移住してくる状況である。なぜなら、最初からその言語(のある特定な方言)が使われている地域にほかの方言を話す話者が入ってくる場合には、コイネが形成されるのではなく、移住者がその移住先の方言を習得することが普通である。日本では、北海道方言がコイネとしてあげられる。日本語が話されていなかった地域(アイヌ語使用地域)に日本各地(福井、奈良、広島など)からの話者が入ってくると、福井方言が優勢となったとか、奈良方言が優勢となったという状況ではなかったから、それぞれの方言が混ざり、新たな変種が生まれた。太平洋のフィジ島にインド人が移住した歴史がある。契約労働者としてイギリス帝国に連れて行かれた彼らはヒンディ語の多数の方言を話していたので、現在のフィジではそれぞれが混ざり合ってきたコイネヒンディ語が

話されている。

琉球語使用地域の各地から旧南洋庁のテナアン、あるいは無人島だった南大東島に住み着いたときに一種のコイネ琉球語が形成された可能性も考えられる。(今のところ、その仮説を裏付けるデータはあまりないので、空想程度にとどまっている話である。)もちろん、琉球語使用地域の中での移住・人口移動もあった。本島の人々が石垣に開拓者として入った、あるいは逆に離島各地から人が仕事を求めて那覇など本島の都市部に移り住んだことも言語的に興味深い課題である。

しかも、ウチナーヤマトゥグチ(奄美群島のトン普通語なども同様)はむしろ、地域ごとに、住民が標準日本語を話そうとする際に生じたのではないだろうか。もし、そうだとしたら、これはコイネとはかなり異なった現象である。

これから、方言接触及び、同一方言地域内での言語使用の二つの要因の相対的ウェイトを探らなければならないだろう。筆者が思うには、ウチナーヤマトゥグチの形成には、琉球語の異なった方言を話す人々の言語接触がある程度の役割を果たした(その程度の大きさを突き止めるのがこれからの大きな課題の一つである)。しかし、コイネという現象は、同じ言語の複数の方言との間で起きた接触によって生じるその言語の新しい変種である。北海道では、日本語の複数の方言との間にコイネ日本語が生じた。フィジで起きたのは、ヒンディ語の複数の言語変種との接触によって生じた新たなコイネヒンディ語であった。

以下、表9でコイネ化の特徴とウチナーヤマトゥグチの特徴をまとめて比較する。

複数の琉球語との接触によって新たなコイネ琉球語が生じたところがあるかもしれないが、ウチナーヤマトゥグチは琉球語の変種ではなく、琉球語の影響を受けた日本語(本土)の変種である。よって、ウチナーヤマトゥグチはコイネに分類できないという結論に至る。

表9 コイネとウチナーグチの違い

	コイネ	ウチナーヤマトゥグチ
接触しているのは同一系統の言語である	○	○
同系統の言語の接触によって新しい言語体系が誕生	○	○
接触している変種は複数	○	○
複数は2つというよりも3つ以上	○	×
接触している言語変種は同一言語の複数の方言である	○	×
方言間のリングフランカとしての役割を果たす	○	×
均一化 levelling	○	×
単純化 simplification	○	×

10. ウチナーヤマトゥグチは「混合言語」と呼べるか

上で、3つ以上の言語が接触するときに生じるピジンを検証したが、2つだけの言語が接触するときに生じる接触言語もある。それを「混合言語」と呼ぶ。混合言語は Bakker (1994) が提唱した Mixed Language の訳である。混合言語とピジン・クレオールとの違いは、ただ単に単純化の程度の違いではない。混合言語はピジン・クレオールとは質的に違うものである。

混合言語はピジンやクレオールと違って、文法的な単純化がほとんど起きていない。二つの言語が、文法事項を単純化しないままに「絡み合っている」(intertwining) のである。ピジン化は3つ以上の言語を母語とする人々の接触が普通だが、混合言語は2つの言語のみが接触する状況に見られる。ピジン化の場合は語彙を提供する「上層言語」(1つ)とそれを習得しようとしている人々の母語である「基層言語」(2つ以上)という役割分担が明確であるが、混合言語の場合、2つの言語が同等に近い状態で混ざり合う。ピジン化の場合、

基層言語は表層に現れにくい。表面的に見られるのは「上層言語」である。だから、「ピジン英語」、「ピジンフランス語」、「ピジン日本語」などと呼ばれる。しかし、混合言語の場合は両方の起点言語がほぼ半々で現れるから、ピジンのように「英語の一種」のように感じられることはない。

実は混合言語と呼ばれる現象には、2種類がある。それぞれの種類の代表的な言語としてミチフ語 (Michif) とロマニ語 (Romani) を選んで、表10でそれ

表10 混合言語とウチナーグチの違い

	Michif 型混合言語	Romani 型混合言語	ウチナーヤマトゥグチ
二つの言語要素が現れている	○	○	○
二つの言語は別系統の言語	○	○	×
母語になっている	○	○	○
言語転移・干渉が見られる	×	×	○
従来の言語変種と新しく誕生した言語変種との相互理解が不可能	△ (それぞれの部分が理解できるが、会話に付いて行くのが無理)	△ (それぞれの部分が理解できるが、会話に付いて行くのが無理)	○
明確な日標言語があり、言語習得が行なわれる	×	×	○
母語による干渉・転移が大きい要因	×	×	○
接触している言語変種との力関係に大きなギャップがある	△	△	○
発生 (「残存民族型」対「突然発生型」)	突然生じた	数世代に渡り、同化による祖先の言語からのシフト	突然生じた
動機	両集団へのアイデンティティの葛藤	同化への抵抗	同化への抵抗
機能	アイデンティティ表示	隠語	アイデンティティ表示
民族集団	ミックス	単一	単一

ぞれの特徴からウチナーヤマトゥグチの性質を検証している。

ウチナーヤマトゥグチの背景には二つの言語（琉球語と標準日本語）がある。その意味において、ウチナーヤマトゥグチはピジン・クレオールよりも混合言語に近いのである。しかし、表10で分かるように、混合言語とウチナーヤマトゥグチとの重要な相違点がかかなり多い。ウチナーヤマトゥグチは混合言語と呼ぶことはできないのである。

11. 二起点言語の接触言語という新しいパラダイムの提唱

Bakker が提唱している混合言語は、ピジンやクレオールと並ぶ別の言語体系である。Trudgill が混合言語の考え方を大胆に変えることを提案している。それは、混合言語を一つの現象と見るのではなく、従来のピジン・クレオールパラダイムと並行する別のパラダイムとして考えるべきだ、という提案である。ピジン・クレオールの場合は一つの上層言語の存在が大きいが、混合言語の場合は、両方の起点言語の単語が入っている。そのため、混合言語の名称変更として「二起点接触言語」(Dual Source Contact Language) を提案している。

ウチナーヤマトゥグチの位置づけを再検討する必要があるのではないかとと思われる。次の表11を見よう。参考のために、小笠原やピトケアン、ノーフォークといった島社会で起きた言語体系を、それぞれの段階の二起点接触言語の例として挙げた。

12. 結語

ウチナーヤマトゥグチはクレオールや Mixed Language (混合言語)、ネオ方言をはじめ、言語接触論の様々な現象との共通点がある。しかし、これらのいずれの概念とも異なる重要な点が見られる。「ウチナーヤマトゥグチはどれにも当てはまらない」という結論は否定的に捉えるべきものではなく、むしろ、新しい概念を打ち出す機会だと考えるべきであろう。

表11 ピジン・クレオールおよび二起点接触言語の
両パラダイムから見たウチナーヤマトゥグチ

従来のピジン・クレオールのパラダイム	二起点接触言語 Dual Source Contact Language	ウチナーヤマトゥグチ
a 前ピジン prepidgin		
b ジャーゴン jargon		
c 限定ピジン limited pidgin		百年前、母語ではなく、中間言語、不完全に学習された言語だったので、レベル的にはピジンに相当するものがあつた。
d 拡張ピジン expanded pidgin	戦前の小笠原混合言語	ウチナーヤマトゥグチは母語となった。そういう意味では、クレオールと同レベルの言語現象である。
e クレオール creole	戦後の小笠原混合言語	
f クレオロイド (creoloid)	ピトケアン・ノーフォーク語	
g クレオール連続体 creole continuum		沖縄で「クレオール連続体」に相当する言語変種の連続体が見られる
h 脱クレオール化 de-creolization	返還後の小笠原で起きている	脱クレオール化がさほど見られない。むしろ、若い人のことばは東京語からますます離れていく
i postcreole ポスト クレオール		

謝辞

本稿は2009年7月5日、琉球大学で開催された沖縄言語研究センターの研究会の発表を改訂加筆したものである。研究会の際に、かりまたしげひさ先生をはじめ、貴重な意見をくださった方々に御礼申し上げます。

関連文献

- 大城明子, 尚真貴子 (2007) 「日本語バイリンガルへのパスポート」 沖縄国際大学日本語
教育教材開発研究会
- 大野眞男 (1995) 「中間言語としてのウチナーヤマトゥグチ」 『言語』 24-12
- カイザー, シュテファン (1997) 「Yokohama Dialect 日本語ベースのピジン」 『国語研究
論集 (東大国語研100周年)』 83-106
- カイザー, シュテファン (2005) 「Exercises in the Yokohama Dialect と横浜ダイアレク
ト」 『日本語の研究』 1巻1号
- カイザー, シュテファン (2007) 「Exercises in the Yokohama Dialect と外国語学習」
『大学における日本語教育の構築と展開: 大坪一夫教授古稀記念論文集』 ひつじ
書房
- 金沢裕之 (2008) 『留学生の日本語は未来の日本語・日本語の変化のダイナミズム』 ひ
つじ書房
- 狩俣繁久 (2002) 「琉球の方言」 『朝倉日本語講座 10 方言』 朝倉書店
- かりまたしげひさ (2006) 「沖縄若者ことば事情 一琉球・クレオール日本語試論」 『日
本語学』 25: 50-59
- かりまたしげひさ (2008) 「トン普通語・ウチナーヤマトゥグチはクレオールか 一」
- 真田信治, 簡月真 (2008) 「台湾における日本語クレオールについて」 『日本語の研究』
4-2
- 高江洲頼子 (1994) 「ウチナーヤマトゥグチ 一その音声, 文法, 語彙について一」 『那覇
の方言』 沖縄言語研究センター研究報告書 3
- 高江洲頼子 (2004) 「ウチナーヤマトゥグチ 一動詞のアスペクト・テンス・ムード一」
『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』 ひつじ書房
- トラッドギル, ピーター・(2003) 「グローバル化と近代ヨーロッパにおけるアウスバウ
社会言語学」 (来日講演の日本語訳原稿配布物)
- 永田高志 (1996) 『琉球で生まれた共通語』 おおふう社
- 長友和彦 (1993) 「日本語の中間言語研究一概観一」 『日本語教育学』 81:1-18
- ロンゲ, ダニエル (2000) 「日本語の「核(コア)」を探る一他言語との接触によって変

- わるもの・変わらないもの」第89回変異理論研究会における口頭発表10月28日
- ロング, ダニエル (2006) 「日本語の非母語話者を研究対象にした新しい社会言語学の可能性」『日本のフィールド言語学 新たな学の創造にむけた富山からの提言』: 17-33 桂書房
- ロング, ダニエル (2008) 「英語を母語とする日本語学習者の音声学的難点と音韻論的限界」『第22回日本音声学全国大会予稿集』1-12頁
- ロング・ダニエル, 新井正人 (2008) 「台湾系石垣島民コミュニティの言語使用状況」『日本語学会2008年度春季大会予稿集』207-210
- ロング, ダニエル, 小松恭子, 新井正人, 米田早希 (2007) 「サイパンの日本語について—実態調査の中間報告—」『人文学報 (日本語教育学編)』382:15-39
- ロング・ダニエル, 橋本直幸 (共編) (2005) 『小笠原ことばしゃべる辞典』(小笠原シリーズ3) 南方新社
- Bakker, Peter and Maarten Mous, eds. (1994) *Mixed languages: 15 case studies in language intertwining*. Amsterdam: Institute for Functional Research into Language and Language Use. (IFOTT).
- Fija, Bairon & Matthias Brenzinger, Patrick Heinrich (2009) The Ryukyus and the New, but Endangered, Languages of Japan. *Japan Focus*.
- Fija, Bairon & Patrick Heinrich (2007) "Wanne Uchinanchu-I am Okinawan. Japan, the US and Okinawa's Endangered Languages" *Japan Focus*.
- Long, Daniel (2007) *English on the Bonin (Ogasawara) Islands*. Durham.: Duke University Press.
- Trudgill, Peter. (2002) "Ausbau sociolinguistics and the perception of language status in contemporary Europe" *Sociolinguistic Variation and Change*. Edinburgh: Edinburgh U. Press, 114-124.
- Trudgill, Peter. 1996. "Dual-Source Pidgins and Reverse Creoloids: Northern Perspectives on Language Contact" In *Sociolinguistic Variation and Change*. Georgetown University Press.: 68-75.